様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ５ 月 １３ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２３６７

研究課題名（和文）先行詞への話し手の視点と聞き手の記憶：日本語が持つ特殊性を用いた挑戦的な検証

研究課題名（英文）Speakers' empathy on antecedents and saliency for hearers: Research on effects of Japanese language

研究代表者
正路　真一（Shoji, Shinichi）

三重大学・国際交流センター・助教

研究者番号：００７９８４２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、先行詞に対する話し手の“視点／共感度”が、その指示語の選択に影響を及ぼすという仮説を検証したものである。調査者は、「・・・てあげる」または「・・・てくれる」という表現によって異なる共感度を示された先行詞を含む第１文、そして先行詞の名前、三人称代名詞、空代名詞を指示語として含む第２文を用いた自己ペース読文実験を実施した。結果、指示語が代名詞である場合において、話し手の視点／共感度が指示語の選択に影響を与えることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
指示語と先行詞にかかる研究は心理言語学の分野において活発に取り上げられているトピックであるが、話し手の視点／共感度を実験において検証した研究はこれまでなく、その初めての試みである点に、本研究の学術的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The current study tested a hypothesis that speaker's "perspective/empathy" on antecedent entity affects the choice of anaphors. The investigator conducted the self-paced reading experiments, which utilized antecedents in the first sentence (that included -te ageru or -te kureru) and the anaphors (that were either repeated name of the antecedents, overt pronoun or null pronoun) in the second sentences. The results indicated that, in the case that the anaphors were pronouns, speakers' perspective/empathy status of antecedents affects the choice of anaphors.

研究分野：言語学

キーワード：日本語　先行詞　指示語　代名詞　共感

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は日本語の指示語と先行詞についての言語学的研究である。先行詞と指示語の関係は、これまで心理言語学の分野において最も活発に行われてきた研究テーマの一つである。特に、先行詞が文法的な主語、また文頭に置かれている語である場合に、その先行詞が聞き手・読み手の記憶に残り易くなることは広く認知されている（Arnold, 1998）。また、記憶に残り易い先行詞を指示語によって指し示す場合には、具体性の低い指示語の使用が好まれること（指示語を使わないケースを含む）が多くの研究で報告されている。逆に先行詞が主語などではないため聞き手・読み手の記憶に残りにくい場合は、固有名詞など具体性の高い指示語の使用も許される –具体性の低い指示語と同様に好まれる、また言語によっては具体性の低い指示語よりも好まれる–ことが明らかとなっている （Gordon, Grosz & Gilliom, 1993; Gelormini-Lezama & Amor, 2011）。以下に例を挙げる。

（1）加藤さんが田中さんにプロポーズした。[先行詞＝加藤さん （主語）]
○　　婚約指輪を渡した。[指示語＝なし （非具体的）]
×　　加藤さんが婚約指輪を渡した。[指示語＝加藤さん （具体的）]

（2）加藤さんが田中さんにプロポーズした。[先行詞＝田中さん （目的語）]
○or×　　婚約指輪を受け取った。[指示語＝なし （非具体的）]
○　　田中さんが婚約指輪を受け取った。[指示語＝田中さん （具体的）]

２．研究の目的

先行詞が主語であることや文頭に位置する語であることに加え、Walker, Iida and Cote (1994) は、話し手・書き手の視点が先行詞に置かれている場合は、視点が先行詞に置かれていない場合に比べて、その先行詞は読み手・聞き手の記憶に残り易いと主張している。本研究はこの主張を仮説とし、これを実験的に検証することを目的としている。視点がどの語に置かれているかを明示的に表す言語は多くないため、Walker at el の主張を検証するのは容易ではないが、日本語の「あげる」と「くれる」という動詞の使い分けにおいては、話し手の視点がどこにあるかが明確に示されている（Kuno & Kaburaki, 1977）。つまり、同じ事象を表している文であっても、話し手の視点があげる側に置かれている場合は、「あげる」が用いられ、視点が貰う側にある場合には「くれる」が用いられる。以下に例を挙げる。

（3）加藤さんが田中さんにお土産をあげた。
（4）加藤さんが田中さんにお土産をくれた。

どちらの文も同じ意味だが、（3）のように「あげる」が使われている場合、この文の話し手・書き手は、あげる側「加藤さん」の立場に立って（つまり加藤さんに視点を置いて）この文を発している。一方（4）のように「くれる」が使われている場合は、話し手は貰う側「田中さん」に視点を置いている。Walker et al の主張によれば、「加藤さん」は（3）においても（4）においても主語であるが、話し手の視点が置かれている（3）のような場合、視点が置かれていない（4）のような場合に比べて聞き手の記憶に残り易い。これが正しければ、（3）の「加藤さん」を、これに続く文の中で指示語を使って指し示す場合、具体性の低い指示語の使用（指示語を使わないケースを含む）が好まれるはずである。逆に記憶に残りにくい（4）の「加藤さん」を指し示す場合には、固有名詞など具体性の高い指示語の使用が具体性の低い指示語と同様、あるいはそれ以上に好まれるはずである。以下に例を挙げる。

（3）’ 加藤さんが田中さんにお土産をあげた。[先行詞＝加藤さん（視点が置かれている語）]
○　　旅行先の名産品だと説明した。[指示語＝なし（非具体的）]
×　　加藤さんが旅行先の名産品だと説明した。[指示語＝加藤さん（具体的）]

（4）’ 加藤さんが田中さんにお土産をくれた。[先行詞＝加藤さん（視点が置かれていない語）]
○or×　　旅行先の名産品だと説明した。[指示語＝なし（非具体的）]
○　　加藤さんが旅行先の名産品だと説明した。[指示語＝加藤さん（具体的）]

以上の仮説を検証するため、本研究は、先行詞に話し手の視点が置かれている場合と置かれていない場合において、どのような指示語が好まれるかを調べる。これは、話し手の視点が先行詞に置かれていることによって、その先行詞が聞き手の記憶に残り易くなるか否かを問うものである。

３．研究の方法

検証を行う方法としては、多くの先行研究に倣い（Gordon, Grosz & Gilliom, 1993; Gelormini-Lezama & Amor, 2011）、被験者がスペースキーを押すたびにコンピュータースクリーン上に呈示される文が入れ替わる自己ペースリーディング法を用いた。まずスクリーン上に先行詞を含む第一文が現れ、被験者がスペースキーを押すと指示語を含む第二文が現れる。被験者は第二文を読了すると再びスペースキーを押す。一回目と二回目にスペースキーを押した間の時間が、指示語を含む第二文を読了した時間として記録される。

実験は二つに分けて行った。実験１の第二文には、具体性の高い指示語として先行詞の人名を用い、一方具体性の低い指示語として空代名詞を用い、対比した。下に例文を示す。

（5）
第一文　加藤さんが田中さんにお土産をあげた。[先行詞＝加藤さん（視点が置かれている語）]
第二文 a.　　旅行先の名産品だと説明した。[指示語＝なし（非具体的）]
第二文 b.　加藤さんが旅行先の名産品だと説明した。[指示語＝加藤さん（具体的）]

（6）
第一文　加藤さんが田中さんにお土産をくれた。[先行詞＝加藤さん（視点が置かれていない語）]
第二文 a.　　旅行先の名産品だと説明した。[指示語＝なし（非具体的）]
第二文 b.　加藤さんが旅行先の名産品だと説明した。[指示語＝加藤さん（具体的）]

結果の分析においては、まず (5) の第二文 a と第二文 b の読了時間の差を検出し、また (6) の第二文 a と第二文 b の読了時間の差を検出する。そして最後にその二つの読了時間の間に有意差があるかを検定する。先行詞に視点が置かれている (5) の場合、具体性の低い指示語が好まれると思われるため、具体性の低い指示語を含む第二文を a 読む速度は、具体性の高い指示語を含む第二文 b を読む速度よりも速いと予想された。一方、先行詞に視点が置かれていない (6) の場合は第二文 a と b の読了時間の差が消失、または逆転するものと予想された。この (5) と (6) の ab 間の読了時間の差が有意に違えば（つまり先行詞と指示語の有意な交互作用が観察されれば）、「話し手の視点」と「先行詞の聞き手にとっての記憶に残り易さ」との関係を示すものとなる（Gelormini-Lezama & Amor, 2011）。

また、実験２の第二文には、具体性の高い指示語として、人名の代わりに三人称代名詞（「彼・彼女」）を用い、これを具体性の低い空代名詞と対比した。下に例文を示す。

（7）
第一文　加藤さんが田中さんにお土産をあげた。[先行詞＝加藤さん（視点が置かれている語）]
第二文 a.　　旅行先の名産品だと説明した。[指示語＝なし（非具体的）]
第二文 b.　彼が旅行先の名産品だと説明した。[指示語＝彼（具体的）]

（8）
第一文　加藤さんが田中さんにお土産をくれた。[先行詞＝加藤さん（視点が置かれていない語）]
第二文 a.　　旅行先の名産品だと説明した。[指示語＝なし（非具体的）]
第二文 b.　彼が旅行先の名産品だと説明した。[指示語＝彼（具体的）]

結果の分析については、実験１と同様である。

実験は、三重大学の学生を被験者として、申請者の研究室で実施した。

４．研究成果

実験の結果、指示語として人名と空代名詞を用いた実験１においては、第二文を読む速度について、予想された速度の差は観察されなかった。つまり、(5) にある具体的な指示語を含む第二文 a と非具体的な指示語を含む第二文 b を読む速度の差と、(6) にある具体的な指示語を含む第二文 a と非具体的な指示語を含む第二文 b を読む速度の差を比較したところ、有意差は見られなかった。したがって、話し手・書き手の視点が先行詞に置かれている場合、視点が先行詞に置かれていない場合に比べて、その先行詞が読み手・聞き手の記憶に残り易いという Walker, Iida and Cote (1994)の主張を支持する結果は示されなかった。

一方、指示語として三人称代名詞と空代名詞を用いた実験２においては、第二文を読む速度について、予想された速度の差が観察され、有意な交互作用が検出された。つまり、前段の(7) にある具体的な指示語を含む第二文 a と非具体的な指示語を含む第二文 b を読む速度の差と、(8) にある具体的な指示語を含む第二文 a と非具体的な指示語を含む第二文 b を読む速度の差を比較したところ、有意差が検出されたということである。これは話し手・書き手の視点が先行詞に置かれているか否かによって読み手・聞き手の記憶に残り易さに影響が与えられることを示すものであり、Walker, Iida and Cote (1994) の主張を支持するものである。さらに、Walker et al の主張は、記憶に残り易い先行詞を好む空代名詞（非具体的な指示語）の読了速度によっても示された。具体的には、空代名詞を含む第二文 a は、話し手の視点が置かれた先行詞（「あげる」文の先行詞）の場合の方が話し手の視点が置かれていない先行詞（「くれる」文の先行詞）の場合

よりも有意に速く読まれているという結果を示した。

指示語に人名を用いた実験１においては予想された効果が確認されず、指示語に三人称代名詞を用いた実験２においては効果が確認されたという結果は、Walker, Iida and Cote (1994) の主張を率直に反映していない。話し手の視点が置かれた先行詞が読み手・聞き手の記憶に残り易いならば、実験１においても実験２と同じような結果が現れるはずである。この矛盾した結果に関しては、日本語の三人称代名詞が反発話主体性を持つ（Kuno, 1986）という説明によって解釈が可能である。反発話主体性とは、ある文がある人物の発話、感情等を報告している場合、その文に含まれる代名詞がその人物（発話、感情の主）を先行詞としないという性質を意味する。発話、感情の主とは、つまりその文の視点の主、つまり話し手・書き手と概ね一致する（Sells, 1987）。そのため、本研究の実験２においては、日本語三人称代名詞が視点の主である先行詞を指示してはいけないものとして被験者に解釈され、これが話し手の視点が置かれた先行詞を好む空代名詞との有意な差を生んだと考えられる。つまり実験２の有意な結果は、先行詞の記憶に残り易さの違いと三人称代名詞の反発話主体性による効果の合算であり、実験１の有意でない結果は、反発話主体性を欠いたためであり、先行詞の記憶に残り易さの違いだけでは有意差が表れるほどの効果が現れなかったと考えられる。

冒頭に記した通り、心理言語学の分野では、先行詞が主語であることや文頭語であることが、読み手･聞き手の記憶に残り易くなるための大きな要素であることは広く知られている。しかし、先行詞に視点が置かれていることが、その先行詞の「記憶に残り易さ」に影響するという Walker, Iida and Cote (1994) の仮説を検証した実験報告はまだない。このテーマに関しての実験的検証が行われていない背景としては、話し手の視点が、語句の主語性や語順に関係なく明示される言語が少なく、主語性や語順などの影響を取り除いた実験文を作ることが困難であるという事情が推測される。しかし、日本語では「あげる・くれる」の動詞を使った実験的検証が可能である。従って、視点と先行詞の「記憶に残り易さ」との関係を実験によって検証したのは本研究が初めての試みであると思われる。これまでの先行詞と指示語にかかる先行研究は、特に英語またはロマンス語族（スペイン語、イタリア語など）において多く実施されてきたが、本研究は、日本語の特性を利用することで、多くの他言語では検証不可能なテーマを可能としたものであると言える。

＜引用文献＞

① Arnold, J. (1998). Reference form and discourse patterns. (Doctoral dissertation). Stanford University, CA.

② Gelormini-Lezama, C., & Amor, A. (2011). Repeated names, overt pronouns, and null pronouns in Spanish. *Language and Cognitive Processes, 26*, 437-454.

③ Gordon, P. C., Grosz, B. J., & Gillion, L. A. (1993). Pronouns, names, and the centering of attention in discourse. *Cognitive Science, 17*, 311-347.

④ Kuno, S. (1986). Anaphora in Japanese. In S-Y. Kuroda, (Ed.), *Working papers from the first SDF workshop in Japanese syntax* (pp. 11-70). San Diego: UCSD Department of Linguistics.

⑤ Kuno, S., & Kaburaki, E. (1977). Empathy and syntax. *Linguistic Inquiry, 8*, 627-672.

⑥ Sells, P. (1987). Aspects of logophoricity. *Linguistic Inquiry, 18*, 445-479.

⑦ Walker, M. A., Iida, M., & Cote S. (1994). Japanese discourse and the process of centering. *Computational Linguistics, 20*, 193-232.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Shinichi Shoji
２．発表標題 Antecedent Saliency and Empathy in Japanese
３．学会等名 CUNY Human Sentence Processing（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Shinichi Shoji
２．発表標題 Antecedent Saliency, Pronouns, and Empathy in Japanese
３．学会等名 Human Sentence Processing（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関